平成２６年度

創立３５年

安積三小　　学校だより

三しょうの丘　　No.11

（承認　賞賛　奨励）

平成２７年2月２０日
安積第三小学校

わたし

テレビのスイッチを切った時
蛍光灯も消してみた
初めて訪れたような闇の中に
自然と耳を澄ます自分がいた
すると
それまで気づかなかった音が
聞こえてくる
私に聞こえなかったのか
私が聞こうとしなかったのか
やがて　闇に目がなれてくる
何かを見ようとする自分がいた
電気のついていない闇の中でも
さまざまなものが見えてくる

今まで見えなかったもの
その中で
いちばん見えてきたのは
自分自身かもしれない

青少年の問題行動の背景

いつの時代でも、子どもは親にとって心配のたねですが、その心配の内容は時代によって変化してきています。おおもとのところでは、「わが子が立派に成長してほしい」という思いがあります。その「立派な成長」ということのイメージが時代によって変化し、心配の内容を変えてきています。

わたしが小さいころの時代は、親は日々の生活に忙しくて余裕がなかったので、子ども自身の自己成長を信頼し期待していました。以前も学習が苦手な子もいましたし、不良じみた子もいました。でも、近所の人達はそういう子をずっと見守っていました。「近頃あの子の姿を見ないけど、どうしたのだろう」とか「あの子がこの間、向こうからあいさつしてきた」と成長ぶりを確かめたりしていました。そのうちに、あばれん坊が会社に通いだしたり、姿を見せなかった女の子が、立派な大人になって盆踊りに現れたりして、近所の人達を驚かせたり安心させたりしていました。そういう雰囲気が地域の大人と子どもをつないでいたような気がします。

今は、どうでしょうか。日本中を震撼させた女子高校生による殺人事件に代表されるような、「まさか」と思うような事件が起こっているのです。勉強もよくでき、部活動にも熱中していた少女が思いもかけない大罪を犯してしまうのです。

考えられるのは、成長するそのときどきの過程でしっかりと身に付けなければならない「人間としてどう生きるべきなのか」という道徳的な規範や集団生活をする上でのルールなどが、育てられていないということです。しつけの最も基本的なことのひとつである「あいさつ」すら満足にできない子が増えているともいわれています。

大人が子どもに期待するあまり、自分の子どもばかりに没頭し、近所の子への目配りどころではなくなっているのかもしれません。そこでは、子どもの自然な自己成長への信頼や期待が消えるということに気がつかないのです。子どもが自ら成長しようとする気持ちを、大人は尊重すべきなのに、大人のやり方で成長を押しつけてきているのかもしれません。

昨今の、子どもたちをめぐる問題のほとんどは、子ども達自身の意志と要求にもとづいて、自分の成長の方向とテンポをきめなければならないという最も大事なことを、大人がうばってしまったことによって起こっているといわれています。

「学校が」「家庭が」「地域が」と、責任を転嫁し合うのではなく、今こそ、それぞれが果たすべき役割を確認し合い、緊密な連携のもとに教育力を存分に発揮すべきときであると思うのです。

先輩の思いが詰まる学校林、次の子ども達へつないで

「まざんね会」の方々が、整備してくださっているおかげで、一層学校林の魅力が増しています。大変環境もよくなり、学校林が、学校と地域の宝になってきているように感じます。今年度は、入り口に手作りの看板を設置していただき、募集した子ども達の作品も月替わりで掲示されています。でも、ちょっと残念なこともあります。整備した通路にはられているロープが時々切られていることです。学校内外が、いつもきれいで、それを子ども達や地域のみなさんが誇らしく思えるような学校でありたいと思い環境整備に努めているところです。子ども達を取り巻く地域に住む方々一人一人の責任として、学校と地域とが力をあわせて対処していきたいと思います。ご協力をお願いいたします。